

5

淡水・汽水産魚類

カワバタモロコ

Hemigrammocypripis rasborella

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

絶滅

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

最初の記録以来、確実な生息記録は無く、絶滅の可能性が高い。
生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

静岡県以西の本州、四国および九州北西部に分布する。
平野部の砂泥質の浅い池沼・ため池・水路に生息する。産卵期は5～7月で、流れの緩やかな水路やため池などの水際の水草や冠水した陸上植物に産卵する。藻類を主体とする雑食性。

県内の生息状況

四国における分布は徳島県と香川県のみ。香川県では高松市周辺の新川や鴨部川、春日川のほか、金倉川と土器川の各水系から散発的な記録がある。

徳島県では岡田・中村（1946）による石井町藍畑の水路の記録が唯一のもの。しかしこれ以降、この場所からも他の水域からも生息の確実な記録は無く、絶滅した可能性が高い。ただし、溜池や旧吉野川周辺のハス田の調査はほとんどなされていないので、注意を要する。広い生息域は必ずしも必要ないので、隔離された池などにパッチ的に残存している可能性はある。

生存に対する 脅威・保護対策

圃場整備事業や土地開発にともなう水路や細流のコンクリート化・直線化などの構造変化や溜池の消失、水質汚濁、農薬などが脅威となる。また、とくに溜池ではオオクチバスやブルーギルなどの魚食性魚類の移植の影響が大きい。

良好な自然環境の水路・細流と溜池の保全・復元が必要である。

参 考 文 献

安芸昌彦・大高裕幸. 2000. 香川県におけるカワバタモロコの採集記録. 香川生物, (27).

岡田弥一郎・中村守純. 1946. 四国及淡路島に於ける淡水魚とその分布. 資源研短報. 7.

川那部浩哉・水野信彦編. 1995. 日本の淡水魚, 第2版. 山と溪谷社.

中坊徹次編. 2000. 日本産魚類検索: 全種の同定, 第2版. 東海大学出版会.

水産庁編. 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. (社)日本水産資源保護協会.

植松辰美・須永哲雄・川田英則. 1979. 香川県の淡水魚. 動物と自然. 9(1).

スナヤツメ

Lethenteron reissneri

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

II 類

選 定 理 由

ここ数十年で多くの生息地が失われ、現在の生息地はきわめて限定されている。どの生息地も規模が小さく、かつ生息個体数がひじょうに少ない。生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

宮崎県を除く九州以北、国外では沿海州、中国北部、朝鮮半島に分布する。本種の幼生(アンモシーテス)は軟泥底に潜入して生活するが、変態したあとの成魚は礫底に移動し、産卵する。したがって軟泥の堆積する淵やトロまたは湧水池と泥をかぶっていない礫底からなる瀬が隣接するような場所が必須である。しかも水質の悪化には弱く、また夏期水温が 25℃ を越えるような場所では生息できない。湧水を生じるような環境が特に重要である。

県内の生息状況

かつては四国 4 県ともに分布していたが、現在確実に生息することがわかっているのは徳島県と高知県の一部地域のみである。高知県では吉野川水系上流域の 2 支川から知られている。聞き取り等によれば、昭和 30 年代頃までは吉野川水系をはじめ、徳島県下には広く分布していたと思われる。しかし現在では、勝浦川水系に隣接した神田瀬川の源流域と、海部川水系の小川谷川と母川の一部から記録があるだけで、生息地はきわめて限定されている。とくに神田瀬川と母川ではいつ絶滅してもおかしくない状況である。

生存に対する 脅威・保護対策

河床の改変や湧水の枯渇、水質・底質の汚濁などが脅威となっている。すでに生息地はひじょうに限定されている状況なので、その付近における河川工事等の人為的改変には最大限の注意を要する。絶滅の危険を少しでも減らすために、現在確認されている生息地の隣接区間における生息環境の復元が強く望まれる。

特 記 事 項

日本に生息するスナヤツメは遺伝的に大きく異なる 2 つの集団に分かれており(北方集団・南方集団)、それぞれがいくつかの小集団に分かれることが知られている。これらは形態的には識別不能であるが、北方・南方集団間には生殖隔離が働いており、実質的には別種である。なお、徳島県海部川水系のスナヤツメは南方集団に属する。

参 考 文 献

佐藤陽一. 1994. 海部川水系の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (4).
佐藤陽一. 1996. 速報! 18 年ぶりに生息が確認されたスナヤツメ. 徳島県立博物館ニュース, (25).
水産庁編. 1998. 日本の稀少な野生水生生物に関するデータブック. 日本水産資源保護協会.
Yamazaki, Y. and A. Goto. 1996. Genetic differentiation of *Lethenteron reissneri* population, with reference to the existence of discrete taxonomic entities. Ichthyological Research, 43(3).

オオウナギ

Anguilla marmorata

ウナギ目ウナギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地がきわめて限定されている。
生息を脅かす要因の改善がみられない。

分布の概要

インドー西太平洋の熱帯～亜熱帯域を中心に広く分布する。日本のような温帯域は分布の北限域にあたり、太平洋側では利根川が、東中国海側では長崎県がそれぞれ北限となっている。太平洋側では房総半島、伊豆半島、紀伊半島など黒潮に直接面した地域の河川に特徴的に出現する。
ウナギと同様、外洋で産卵し、河川に遡上し成長する降河回遊魚である。中流域の岩の間隙や穴に生息する。夜行性でエビ・カニ類や魚類などを捕食する。

県内の生息状況

四国では香川県を除く 3 県に分布する。
徳島県における記録は天然記念物に指定されている海部町の母川（海部川水系）のみであるが、1960 年以降の記録はなく、絶滅に近い状態にある可能性が高い。聞き取りによれば、かつては海部川のおもな支川にも生息していたようである。
なお、記録はないが、海部郡内の他河川における比較的小型の個体の生息の可能性はあると思われるので、注意が必要である。

生存に対する 脅威・保護対策

本種の生息には身を隠す間隙が必須である。とくに河川改修による護岸のコンクリート化や淵の消失が脅威となっている。本種は成長すると大型の個体で 2m を超えるため、成長段階に応じた多様なサイズの間隙や豊富な餌生物が必要である。
本種の稚魚は黒潮によって毎年供給されていると考えられる。従って、適切な生息環境を復元してさえやれば、再移住し、定着する可能性は高いと思われる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編. 1995. 日本の淡水魚, 第 2 版. 山と溪谷社.
大川健次. 1993. 地域教材としての淡水魚ー母川のオオウナギを中心としてー. 徳島県教育研修センター研究紀要, (81).
佐藤陽一. 1994. 海部川水系の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (4).
徳島県. 1978. 環境庁委託第 2 回自然環境保全基礎調査: 動物分布調査報告書 (淡水魚).

ナガレホトケドジョウ

Lefua sp.

コイ目ドジョウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環 庁カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

全国的に減少傾向にある。
生息に特殊な環境条件を必要とする。
生息を脅かす要因が増大傾向にある。

分布の概要

静岡県から岡山県までの本州、淡路島、四国に分布する。
標高 500m 以下の中・低山地を流れる河川源流域～上流域の他魚種があまり生息しない場所に生息する。溪畔林に覆われ河床が昼間でも薄暗い場所を好み、とくに淵尻のこぶし大の礫が堆積する場所で多くみられる。ただし、冬期には湧水を生じる岸近くの礫底に潜んでいることが多い。野外では通常、礫や落ち葉の下に隠れ、遊泳する姿をみかけることは稀だが、飼育下では活発に遊泳する。動物食性で水生昆虫等を食べる。徳島県内での産卵期は 4 月～5 月頃と推定される。

県内の生息状況

四国では愛媛県東部と香川県、徳島県に分布する。
徳島県では、播磨灘側の折野川と紀伊水道側のほとんどの水系、太平洋側の日和佐川水系に分布する。紀伊水道側では吉野川水系から椿川水系まで分布するが、なぜか勝浦川水系では確認できていない。吉野川水系では、北岸域の池田町より下流の阿讃山地を水源とする支川上流部には比較的多く生息するが、南岸域では鮎喰川を除き、分布が散発的で生息個体数も少ない。

生存に対する 脅威・保護対策

各種土木工事に伴う河川及び周辺環境の悪化が脅威である。特に工事に伴うシルトの流入は河床環境を瞬時にして悪化させ、本種の生息に多大な悪影響を及ぼす。また、山間部に不法投棄されたゴミが生息地の環境を汚染し、生息を脅かしていることも多い。
本種は生息環境の特殊性から、淡水魚のなかでも個体群間の隔離度が特に高く、場所ごとに独自の繁殖集団を構成していると考えられる。したがって、安易な移植放流は各個体群ごとの遺伝的独自性を失わせる可能性が高く、本種の保護にあたっては現状の生息地における環境保全を最優先すべきである。

特 記 事 項

本種は既知のどのホトケドジョウ属魚類とも異なる独立種と考えられるが、分類学的には学名が与えられていない未記載種である。種としての実態が明らかにされないままに各地で絶滅の危機に瀕しており、本種の保護を行う上でも一刻も早い記載が望まれる。

参 考 文 献

藤田光・大川健次. 1975. ホトケドジョウの地理的変異について (予報). 魚類学雑誌, 22(3).
佐藤陽一. 1997. 山にすむドジョウーナガレホトケドジョウー. 徳島県立博物館ニュース, (26).
高橋弘明. 1997. 愛媛県東部におけるナガレホトケドジョウの分布. 徳島県立博物館研究報告, (9).
高橋弘明・佐藤陽一・洲澤譲. 1997. 椿泊湾流入河川の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (7).

カジカ小卵回遊型

Cottus sp.

カサゴ目カジカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地がきわめて限定されている。
生息個体数が少ない。
生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

おもに本州と四国の太平洋側に流入する河川に分布する。現在では四万十川水系など、多くの水系で絶滅している。
産卵は感潮域の上限より少し上の礫底で行われる。西日本での産卵期は 1 月から 3 月で、孵化した仔魚は海に流下し、1 ～ 2 ヶ月海で成長した後、川へ遡上する。おもに水生昆虫を餌とする。

県内の生息状況

四国では、吉野川水系から四万十川水系までのおもに太平洋側に流入する約 20 の水系に生息していたが、そのほとんどで絶滅し、現在生息がろうじて確認されているのは徳島県的那賀川水系のみである。なお、愛媛県の加茂川・中山川に生息する回遊性カジカは別種（中卵型）である。
徳島県下では 1946 年岡田・中村により池田町付近の吉野川の記録が最初で、支川鮎喰川で昭和 50 年代（1970 年代）まで生息していた。しかし現在では絶滅した可能性が高い。

生存に対する 脅威・保護対策

両側回遊型の生活史を送るため、河口付近の取水堰や潮止め堰などの各種の構造物は、幼魚が遡上する障害となる。また、河床の浚渫や砂利採取に伴う河床環境の悪化の影響が大きいと考えられ、昭和 30 年代以降、各地で生じた絶滅はこれによる可能性が高い。以上の事業の実施にあたっては事前に影響を詳細に調査する必要がある。さらに、産卵期である冬から早春に、各種工事により生じるシルト流出も瀬の環境を悪化させる。シルトは卵塊に付着し発育を阻害する脅威となるため、発生の防止が必要である。

琵琶湖産アユ種苗に混じり、琵琶湖産の回遊性のカジカ（ウツセミカジカ）が移入することがあるが、在来の小卵回遊型と遺伝的に近縁であり、交雑が懸念される。種苗採集時に混入させない配慮と混入したまま放流しない配慮が必要である。

特 記 事 項

かつてカジカは 1 種とされていたが、河川陸封性の生活史をおくるもののみ現在カジカとし、回遊性のものをウツセミカジカとして扱っている。しかし最近、遺伝学的研究と形態学的研究が進んだ結果、回遊性のものはさらに中卵型の種と小卵型の種の 2 種に分離されることが判明した。また琵琶湖に生息する回遊性のもの（湖沼型・ウツセミカジカと近年されていたもの）は、小卵型の種に近縁な亜種または型と判明した。徳島県に分布するものは、このうち小卵型の種であるが、現時点では正式な記載がまだ行われていないので、「カジカ小卵回遊型」として表記した。

なお、徳島県では河川陸封性のカジカは確認されておらず、四国での確認記録は香川県の土器川・香東川のみである。現在、土器川では絶滅した様子で、生息が確実なのは香東川だけである。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編 .1995. 日本の淡水魚 , 第 2 版 . 山と渓谷社 .
佐藤陽一 .1999. カジカー 20 数年ぶりに生息を確認 . 徳島県立博物館ニュース , (34) .
徳島淡水魚研究会編 .1987. 徳島県魚貝図鑑〈淡水魚編〉 . 徳島新聞社 .
岡田弥一郎・中村守純 .1946. 四国及淡路島に於ける淡水魚とその分布 . 資源研短報 .7.
中坊徹次編 .2000. 日本産魚類検索 : 全種の同定 , 第 2 版 . 東海大学出版会 .
清水孝昭ほか .1994. 愛媛県加茂川におけるカジカ *Cottus pollux* 回遊型の初期生活史 . 徳島県立博物館研究報告 , (4) .

アオギス

Sillago parvisquamis

スズキ目キス科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が限定されている。
生息個体数が著しく減少している。
生息を脅かす各種要因が増大傾向にある。

分布の概要

かつては東京湾以西の内湾や河口域に広く分布していたが、現在ではほとんどの地域で絶滅した。比較的近年の記録があるのは福岡県の豊前海、大分県の別府湾周辺、鹿児島県の吹上浜、山口県の厚東川河口、徳島県の吉野川河口、国外では台湾だけである。
初夏に淡水の影響下にある河口や内湾の砂質干潟地先の浅瀬で産卵し、幼魚は付近で成長する。水温の低下とともに沖の深みに移動する。

県内の生息状況

四国で記録があるのは、徳島県の吉野川河口付近だけである。昭和 30 ～ 40 年頃までは比較的普通に生息していたようであるが、1989 年の 7 ～ 8 月に吉野川河口南側の沖洲海岸地先で 3 個体が採集されたのを最後に記録がない。現在この場所は沖洲流通港湾整備に伴う第 1 期埋立によって存在しない。
採集された 3 個体のうち、少なくとも 1 個体はメスの成魚で、完熟卵を有しており、魚体を手で持っただけで卵がこぼれ出てきたことから産卵直前であったことがわかる。この場所は水深 2 ～ 3m で、底質は有機物の少ない細砂であり、産卵場として利用されていたとみられる。

生存に対する 脅威・保護対策

河口周辺の埋立が最大の脅威である。とくに波あたりの静かな砂質干潟とその周辺の生息環境の保全が重要である。水質・底質の汚濁にも弱いと考えられる。

特 記 事 項

吉野川河口とその周辺では 10 年以上にわたって記録がないが、絶滅したという確証もないので、今後、夏期を中心に河口の砂質干潟周辺に幼魚が出現していないかどうか、十分に調査する必要がある。
県外の一部地域では、増殖の研究も行われている。現在のところ、徳島県において予定があるわけではないが、絶滅寸前だからといって他地域の個体を増殖し放流する安易な行為は、厳に慎むべきである。生息環境を保全しなければまったく意味がないといえる。

参 考 文 献

水産庁編 . 1998. 日本の稀少な野生水生生物に関するデータブック . 日本水産資源保護協会 .
徳島淡水魚研究会編 . 1987. 徳島県魚貝図鑑 〈淡水魚編〉 . 徳島新聞社 .

シロウオ

Leucopsarion petersii

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

選 定 理 由

生息地がきわめて限定されている。
生息環境が悪化の傾向にある。

分布の概要

北海道南部～九州、国外では朝鮮半島に分布する。
海岸線の複雑なリアス式海岸や島嶼の内湾とそこに流入する小～中規模の河川に生息する傾向がある。
産卵は1月下旬から5月上旬で、南ほど産卵期が早い。上げ潮とともに河川へ侵入し、感潮域上部付近の石の下に卵を産み付ける。孵化した仔魚はすぐに川を流下し、沿岸域のアマモ場などで生活する。寿命は1年である。

県内の生息状況

四国では各県に分布する。

徳島県では阿南市の椿川で本種の四手網漁が毎年のように春の風物詩として紹介されている。現在のところ、生息が確認されているのはこの椿川だけである。しかし、椿川が流入する椿泊湾の他の小河川や阿南市橘湾、海南町浅川湾などでも多少の生息の可能性があると思われ、今後の調査が必要である。

椿川では最下流部の落差工が潮止め堰となっており、これがシロウオ遡上の上限となっている。産卵場として利用されている区間はこの落差工直下のせいぜい数十 m にすぎない。椿川における産卵期は3月上旬から4月中旬頃までである。

生存に対する 脅威・保護対策

産卵は干潮域上部の真水に近い場所の礫底で行われる。そのため、移動経路に障害がないことや、適切な塩分濃度を選択できるようにすること、底質の保全が重要である。具体的には、潮止め堰の設置や河床の浚渫の影響が大きい。

ただし、椿川については、すでに潮止め堰が設置され、護岸がコンクリート化されてはいるが、現状を維持すれば、問題はないと思われる。潮止め堰が老朽化し漏水が多く、かえって堰直下に良好な産卵場をもたらす結果となっている。四手網漁も現状程度であれば、継続して差し支えないであろう。ただし、中～上流域で行われつつある溪畔林の伐採を伴う河川改修は、シルトの流入を招くなど、産卵場の環境に悪影響を与えかねない。椿川は水系そのものが小規模なので、安定した流量を確保するために周辺の森林の涵養も大切である。家庭排水の流入による水質汚濁も改善する必要がある。

参 考 文 献

日本水産資源保護協会編. 1996. 日本の稀少な野生水生生物に関する基礎資料 (III). 日本水産資源保護協会.

高橋弘明・佐藤陽一・洲澤 譲. 1997. 椿泊湾流入河川の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (7).

タビラクチ

Apocryptodon punctatus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

生息地がきわめて限定されている。
生息個体数が少ない。
生息に特殊な環境条件を必要とする。

分布の概要

和歌山県以西の本州、四国、九州に散発的に分布する。有明海とその周辺は主要な産地となっているが、他地域における生息数は少ないようである。国外では朝鮮半島と中国に分布する。
河口付近のシオマネキが生息するような泥干潟に特徴的に生息する。5～7月頃、泥中に掘った穴の中で産卵する。

県内の生息状況

四国では高知県と徳島県だけから知られている。近隣では、徳島県とは紀伊水道を挟んで対岸の和歌山県では加茂川河口と田辺市内之浦からの記録がある。
徳島県における生息確認地は吉野川河口域の住吉干潟のみで、生息数は少なく、まれに採集される程度である。同じ紀伊水道岸の勝浦川や那賀川河口域にも生息の可能性はあると思われるので、注意が必要である。

生存に対する 脅威・保護対策

良好な環境に保たれた軟泥質の干潟域とその周辺にのみ生息するため、そのような生息場所の維持・保全が重要である。堤防の護岸工事などに際しても、干潟面をできるだけ改変しないように注意する必要がある。水質・底質の汚濁も脅威である。

特 記 事 項

最近、鈴木・和田（1999）により、本種とマングローブテッポウエビとの共生関係が示唆されている。徳島県の実地でもマングローブテッポウエビが多くみられることから、今後両種の関係を明らかにしていく必要がある。

参 考 文 献

日本水産資源保護協会編．1997．日本の稀少な野生水生生物に関する基礎資料（IV）．日本水産資源保護協会．
佐藤陽一・藍澤正宏．1992．徳島県吉野川河口から採集されたタビラクチとその分布．徳島県立博物館研究報告，（2）．
鈴木寿之・和田恵次．1999．和歌山県田辺市内之浦で採集されたタビラクチ（ハゼ科）．南紀生物，41（1）．

エドハゼ

Gymnogobius macrognathos

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

全国的に減少傾向が著しい。
生息地がきわめて限定されている。

分布の概要

国内では宮城県～三重県、兵庫県、大分県、宮崎県、国外では沿海州に分布する。ただし国内産と国外産との種の異同については検討が必要である。
有機的汚濁の少ない清浄な河口干潟や汽水湖に生息する。砂質の場所にもみられるが砂泥質の場所を好む。ニホンスナモグリ等の生息孔に隠れていることが多いが、採集時には驚くと自ら砂泥に潜る様子が観察される。産卵もスナモグリ類の生息孔内で行うと考えられるが、詳しい生態については不明。

県内の生息状況

四国では徳島県吉野川河口域のみから記録されているが、今後調査が進めば瀬戸内海側の諸河川から確認される可能性がある。
吉野川河口域における分布状況はヒモハゼとほぼ同様で、両種は同所的に採集されることが多い。生息数はヒモハゼ、ニクハゼよりも少ない。

生存に対する 脅威・保護対策

本種を初めとした干潟性のハゼ科魚類の多くは、微妙な底質粒径の変化に応じて種ごとに生息場所を変えて棲み分けている。また、テッポウエビ類やスナモグリ類との関係も複雑で、単なる生息孔利用者である種から、共生関係にある種まで様々であるばかりでなく、種ごとに共生や利用の相手を厳密に選択している可能性もある。加えて本種は汚濁に弱く、清浄かつ自然度の高い干潟環境を要求する。流況や河川流量が人為的に変化させられると河口干潟の規模や底質の分布状況が大きく変わるおそれがあり、本種の生息にも大きな影響を及ぼす可能性が高い。現存する生息地の環境を保全することが重要である。

特 記 事 項

従来、本種はニホンスナモグリの生息孔を利用すると考えられてきたが、最近の著者らの調査によると、本種が生息する干潟には複数種のスナモグリ類が生息している可能性が高いことが判ってきた。これらと本種の関係については、今後さらなる調査が必要である。

参 考 文 献

長田芳和・細谷和海編.1997. よみがえれ日本産淡水魚 日本の希少淡水魚類の現状と系統保存. 緑書房.
鈴木寿之・増田修.1993. 兵庫県で再発見されたキセルハゼと分布上興味のあるハゼ科魚類 4 種 .I.O.P. DIVING NEWS, 4(11).

チクゼンハゼ

Gymnogobius uchidai

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I 類

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

全国的に減少傾向が著しい。
生息地がきわめて限定されている。

分布の概要

日本固有種で、北海道有珠湾、千葉県、兵庫県、広島県、愛媛県、徳島県、福岡県、長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県に分布する。
有機的汚濁の少ない清浄な河口干潟や前浜干潟の砂底に生息する。ニホンスナモグリ等の生息孔に隠れていることが多い。産卵もスナモグリ類の生息孔内で行うと考えられるが、詳しい生態については不明。エドハゼに似るが一般に体サイズが一回り小さく、下顎下面にヒゲ状突起を有する。また、頭部感覚管の分布状況、体側や尾鰭の斑紋等もエドハゼと異なる。

県内の生息状況

四国では愛媛県、徳島県から記録されている。
徳島県では吉野川その他、勝浦川からの文献記録もあるが、採集個体数が異常に多く、他種を誤同定した可能性もあるため再調査が必要である。
吉野川河口域では吉野川橋上流の砂質干潟に分布が限定されており、個体数もエドハゼよりさらに少ない。これは、本種が嗜好する底質の状態と関係している可能性がある。

生存に対する 脅威・保護対策

エドハゼと同様であるが分布がより局在的なため、環境の改変による影響をより受けやすい状態にある。現存する生息環境の保全が重要である。なお、他河川の河口域についても本種が生息する可能性のある場所については詳細な調査を行う必要がある。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
長田芳和・細谷和海編.1997.よみがえれ日本産淡水魚 日本の希少淡水魚類の現状と系統保存.緑書房.
リバーフロント整備センター編.1997.平成6年度河川水辺の国勢調査年鑑 魚介類調査、底生動物調査編 河川版.BOOK & CD-ROM.リバーフロント整備センター.
鈴木寿之・増田 修.1993.兵庫県で再発見されたキセルハゼと分布上興味のあるハゼ科魚類4種. I.O.P. DIVING NEWS, 4(11).

ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus

コイ目ドジョウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地および生息個体数ともに減少が著しい。

分布の概要

北海道から琉球列島にかけて分布する。国外ではアムール川～北ベトナム、ビルマのイラワジ川に分布する。

おもに泥底に生息する。西日本における産卵期は6～7月で、この時期に周囲の水路などから水田に遡上し、産卵する。孵化した仔魚は水田で成長した後、水路などへ分散する。雑食性。

県内の生息状況

四国ではほぼ全域に生息するが、生息個体数は吉野川や四万十川のような大河川では少なく、おもに小河川や水路やため池に見られる。四国全域で減少が著しく、香川県の土器川のように保護活動が行われている川もある。

徳島県では吉野川、勝浦川、那賀川、牟岐川、海部川などの水系から知られているが、分布情報は十分とはいえない。しかし、生息地の減少は、類似した環境に生息するメダカよりいっそう厳しい状況にあると思われる。

生存に対する 脅威・保護対策

有機汚濁には比較的強い傾向があるが、農薬などの化学物質には弱いため、全国的には1950年代から1970年代初めにかけて毒性の強い農薬が大量使用された時期に激減した。一時生息数は回復していたが、その後圃場整備事業による乾田化・水路の乾燥・水田への移動阻害が増加したため、再び激減した。また、道路・宅地開発等に伴う湿地やため池の埋め立てで生息地が消滅し続けている。水際が護岸されていない流れの緩やかな泥底の水路を残すことと、水路から水田への移動が容易に行える構造への改善が必要である。

特 記 事 項

種内での形態の変異が著しい。また、染色体数が3倍体のものや4倍体のものが存在し、2倍体でも遺伝的に異なるものも報告されており、分類の再検討が必要とされている。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

アカザ

Liobagrus reini

ナマズ目アカザ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

生息地が局地的で、一つの水系内でも生息域が限定されている。

生息地の規模が小さく、生息個体数も少ない。

生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

関東地方の一部を除く宮城県・秋田県以南の本州、四国および長崎県を除く九州に分布する。

水の比較的きれいな川の上流下部から中流にかけておもに生息するが、条件さえよければ、下流でも生息する。浮き石の瀬とシルトの堆積していない淵が連なった区間を好み、石礫の下や間にすみ、夜間活動することが多い。産卵期は5～6月で、瀬の石の下に卵塊として産み付ける。主な餌は水生昆虫。

県内の生息状況

四国では各県に分布するが、各県とも減少が著しい。

徳島県では吉野川、勝浦川、那賀川、福井川および海部川の各水系から知られている。かつては広く分布していたと思われるが、現在では局地的にしか生息していない。ただし、海部川水系における分布は移入によるものと考えられる。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修による良好な瀬と淵の消失と、水質汚濁などが脅威となっている。

浮き石の瀬とシルトの堆積していない淵が連なる構造が必要であるので、河川の改変を行う際には、このような構造に直接的にも間接的にも影響を与えない配慮が必要である。

石礫の下や間にすみ、おもに水生昆虫を食べるため、伏流水の出やすい河床構造の復元が必要である。

特 記 事 項

各地域における変異が大きく、現在、遺伝学的な調査が進められている。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

佐藤陽一.1994.海部川水系の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(4).

水産庁編.1998.日本の希少な野生水生生物に関するデータブック.日本水産資源保護協会.

シラウオ

Salangichthys microdon

サケ目シラウオ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が限定されている。
生息を脅かす各種要因が増大傾向にある。

分布の概要

北海道～広島県および徳島県・熊本県に分布する。国外ではサハリン、沿海州～朝鮮半島東岸に分布する。
一生を河口付近や汽水湖などの汽水域で生活する。産卵期は西日本では3～5月で、河川を遡上し砂底で産卵する。

県内の生息状況

四国における成魚の記録は徳島県だけに限られる。徳島県では吉野川河口および隣接する新町川水系の沖洲川、勝浦川河口から記録がある。
徳島県下では、かつては漁獲の対象になっていたほど多量に生息していたが、現在は漁獲の対象になるほど生息していないこと、勝浦川では河川改修によって産卵場が減少したと考えられることなどから、かなりの減少傾向にあると考えられる。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修による底質の改変、とくに水際の自然で緩やかな水深変化を、護岸等により急傾斜にし、底質粒度の多様性を減少させることが影響する。水質の汚濁とそれにとまなう底質表面への有機性粒子の沈着等も脅威となると考えられる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
佐藤陽一.1991.徳島市都市河川の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(1).
徳島県.1978.環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査:動物分布調査報告書(淡水魚).

メダカ

Oryzias latipes

ダツ目メダカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境庁カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

全国的に生息地の減少がはなはだしい。
県下では生息地はまだ多く残存するものの、やはり減少傾向にあると考えられる。

分布の概要

本州～琉球列島に分布する。北海道南部にも分布するが、移入によるものである。国外では朝鮮半島、中国中～南部および台湾に分布する。
流れの緩やかな小川や用水路、池などに生息する。繁殖期は5～9月頃で、水草に卵を産み付ける。
野外における寿命は1年半で、孵化した次の年に成熟、繁殖に参加し、秋～初冬にかけて死亡する。

県内の生息状況

四国全域の平野部を中心に分布する。徳島県ではおもに吉野川から那賀川にかけての平野部に分布するほか、太平洋側の海岸平野にも散発的に分布する。また、山間部では例外的に三好郡池田町の黒沢湿原（吉野川水系）に分布するが、在来分布かどうかは不明。
徳島県では生息地・生息数ともまだ豊富だといえるが、全国的な傾向同様、昭和30年代以降の圃場整備や都市化の進展に伴い、減少傾向にあるのは確実と考えられる。さらに最近では、遺伝的な組成が異なっている可能性のある他水系のメダカが、自然保護の名目で移植放流されるようになってきており、遺伝的攪乱が懸念される。例えば、池田町の黒沢湿原には野生型メダカが生息していたが、在来分布かどうか調査される以前にヒメダカが放流され、交雑してしまった。

生存に対する 脅威・保護対策

圃場整備以前には水田（湿田）そのものが生息地の役割を果たしていたが、整備され乾田化した結果、田面への侵入が困難となり、生息面積そのものが減少した。それと同時に水路部分がコンクリート化・直線化したため、流速が早くなり、生息に適した場所がさらに著しく減少した。従って、生息地の保全には水路部分では流速の緩和が一つのキーポイントとなる。
近年、流速等が問題とならない溜池でもメダカが生息できなくなりつつある。これはオオクチバスやブルーギルなどの魚食性外来魚が移植されたためと考えられる。移植放流禁止の徹底や移植魚の駆除が必要である。
環境庁版レッドリストにメダカが絶滅危惧種として掲載されて以来、単にメダカを増殖して放流すればよいという短絡的で誤った自然保護観を有する団体や個人によって、移植放流がなされる事例が各地で増加しつつある。この問題はメダカに限ったことではないが、まず生息地・生息環境の保全そのものが必要である。環境教育の徹底が強く望まれる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
上月康則・佐藤陽一・村上仁士・西岡健太郎・倉田健悟・佐良家 康・福田 守.2000.都市近郊用水路網におけるメダカの生息環境要因に関する研究.環境システム研究論文集,28.
清水孝昭.2000.メダカの放流をやめよう.南予生物,11.

トビハゼ

Periophthalmus modestus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境庁カテゴリ

地域個体群

選 定 理 由

生息地が減少している。

分布の概要

東京湾以西の本州、四国、九州から沖縄島まで分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。泥または砂や礫の混じった泥質干潟に生息する。春～秋の干潮時には干潟表面で活発に活動し、5月下旬～8月中旬に巣穴の中に産卵する。冬は巣穴の中で越冬する。

県内の生息状況

四国では4県ともに分布する。

徳島県では紀伊水道側の吉野川（旧吉野川を含む）、勝浦川、那賀川の河口干潟に生息する。ただし旧吉野川での生息数は少ない。また、園瀬川の法花大橋～大野大橋の間でもまれにみられることがあるが、幼魚のみで成魚は生息しない。橘湾岸など、かつては紀伊水道に面した内湾や河口付近で広く生息していたと考えられるが、現在では港湾の整備や埋立、淡水化するための水門の設置等によって生息地となる干潟そのものが失われている。

生存に対する 脅威・保護対策

干潟の消失が最大の脅威である。

なお、タビラクチに比べて塩分や底質に対し広い適応性をもっている。例えば、吉野川における分布範囲は、名田橋周辺から住吉干潟までに及び、底質も泥がちであれば、礫や砂が多く混じったような場所にも生息している。ただし、水質汚濁には弱く、園瀬川河口の貯木場跡付近には干潟が生じるが、流入支川の汚濁がひどくこのような場所には生息できない。園瀬川でまれに確認できるのは、ここより上流に限られる。

参 考 文 献

水産庁編．1998．日本の稀少な野生水生生物に関するデータブック．日本水産資源保護協会．

※絶滅のおそれのある地域個体群：「東京湾奥部のトビハゼ」および「沖縄島のトビハゼ」

ゴマハゼ

Pandaka lidwilli

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が局在、河口域の開発に伴い生息地が消滅するおそれがある。

分布の概要

国内では和歌山県、四国、九州、南西諸島、国外ではオーストラリア（南岸を除く）から西太平洋に分布する。

河口域や淡水の流入する内湾、漁港等の波の穏やかな所に生息する。ブロック、転石、アマモ場等の陰を好み、数十個体から成る群れを形成して中層を遊泳しながら動物プランクトン等を食べる。産卵は初夏。産卵生態については不明であるが、特定の産卵床をつくらず、河床（ただし、岩やブロックの陰等の奥まった場所）に直接卵を産むと考えられている。夏に全長9～10mmほどの稚魚が通常の生息場所に出現する。産まれた翌年の春には成熟し、産卵する。寿命は約1年。

県内の生息状況

四国では愛媛県の宇和海側、高知県中・西部及び徳島県から記録されている。

徳島県では、海部郡由岐町の海岸、田井川、日和佐川から知られている。しかし、現在では日和佐川河口域を除いて安定した個体群は存在しない。日和佐川河口域では右岸側のブロック周辺が生息場所となっており、比較的個体数は多いが分布範囲は狭い。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域で護岸等の改修が成されれば、現在の日和佐川における生息地は簡単に破壊されるおそれがある。工事後に生息環境が改善されたとしても、工事中の影響が無視できない程に重大である。したがって、現在の生息地に影響を及ぼす行為は極力回避し、下流側や対岸等の隣接した場所に新たな生息場所を造成する等の配慮が望まれる。

特 記 事 項

四国のゴマハゼ生息地は事実上、高知県蛸瀬川と徳島県日和佐川の2箇所に限られると言ってよい。日和佐川における個体群の維持は四国産の本種個体群の保護上極めて重要な意味をもつ。

参 考 文 献

道津善衛．1957．ゴマハゼの生活史．長崎大学水産学部研究報告，16(1)．

道津善衛．1989．ハゼ科魚類の保護・移植に関する研究．昭和63年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書．

高橋弘明．1995．蛸瀬川におけるゴマハゼの分布・出現様式．徳島県立博物館研究報告，(5)．

タモロコ

Gnathopogon elongatus elongatus

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布が局限されている。

分布の概要

東海地方以西の本州と四国に分布する。東北地方や九州の一部における分布は移入によるものである。関東地方にも分布するが、在来分布かどうかわかっていない。
中～下流域と周辺の水路や池に生息する。本流より細流に多い。産卵期は4～7月で、水草や抽水植物の根に産み付ける。動物を主体とした雑食性。

県内の生息状況

四国では4県ともに分布する。
徳島県では旧吉野川水系と鮎喰川水系を含む吉野川水系下流域に限られ、園瀬川水系より南にはほとんど分布しない（ただし、園瀬川河口域に合流する多々羅川流域では記録がある）。

生存に対する 脅威・保護対策

本流よりはるその周辺の用水路などの細流を好んで生息するため、圃場整備等に伴う水路の三面コンクリート化や直線化、水草や抽水性植物の消失が脅威となる。なお、水質的には多少の汚濁がみられる水域でも生息可能である。

参 考 文 献

藤田 光・細川昭雄・中瀬宏孝.1970.徳島市の魚類分布－水質との関連において－.総合学術調査報告「徳島」,郷土研究発表会紀要,(15).
川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

タカハヤ

Phoxinus oxycephalus jouyi

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布が散発的で、生息個体数が少ない。
生存を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

静岡県・福井県以西の本州、四国、九州、対馬、五島列島に分布する。国外では、朝鮮半島西部・南部および中国北東部に分布する。
おもに河川上～中流域に生息し、初夏に産卵する。遊泳性魚類としてはカワムツB型やアマゴなどと共存している場合が多い。ただし、これらの共存魚種の生息数が多い場合には、岸近くの岩陰などに潜む傾向が顕著になる。雑食性。

県内の生息状況

四国4県ともに分布する。
徳島県では主要なほぼすべての水系に分布するが、各水系内における分布はかなり散発的である。県内におけるおもな生息場所は上流域の小規模な溪流で、中流的な景観の場所には少ない。生息個体数は一部を除いて多くはない。

生存に対する 脅威・保護対策

道路建設や河川改修などに伴う溪流環境の悪化、とくに溪畔林の消失や土砂の流入による間隙の減少や水質の悪化が脅威となる。

特 記 事 項

本種は地域により体形や斑紋に大きな変異が認められる。阿讃山地周辺に生息するものは一般に尾柄高が他地域のものに比べ低く、繁殖期になると明瞭な黒色縦帯を現すため、一見すると近縁種アブラハヤにきわめてよく似ている。しかし、このような個体も横列鱗数等によりタカハヤに同定される。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

スジシマドジョウ中型種

Cobitis sp. 3

コイ目ドジョウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

全国的に減少傾向にある。
徳島県における南限の桑野川では確認できなくなった。
生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

本州と四国の瀬戸内海側、和歌山県紀ノ川、山陰と福岡の一部に分布する。国外では韓国によく似た形態のものが生息するが、同種かどうか不明。
比較的大きな川の蛇行部に生じた湧水を伴うワンド（O型淵）や、細流・水路の砂泥底を好む。水田付近の細流・水路で産卵する。雑食性。

県内の生息状況

四国では高知県を除く愛媛県、香川県、徳島県に分布する。愛媛県では重信川水系およびそれに連なる小水域のみに、香川県ではほぼ全域に分布する。シマドジョウと共存する河川では、上流側にシマドジョウが、下流側に本種が分布し、シマドジョウよりも泥に富んだ場所を好む傾向がある。
徳島県では吉野川水系から桑野川水系までの紀伊水道側の河川下流域に分布するが、生息数は多くはない。本川そのものよりもワンドや支川に生息することが多い。県下では著しい減少傾向は確認されていないものの、河川の汚濁の進行や圃場整備や河川改修などで生息数は減少していると考えられる。南限の桑野川では過去に生息の記録があるが、最近の確認例はない。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修による良好な砂泥地の減少、水質汚濁、圃場整備事業による良好な細流・水路の減少などが脅威となっている。
水際が護岸されていない流れの緩やかな砂泥底の細流・水路を残すことが必要である。大きな河川では、蛇行部の淵頭の先に生じる伏流水の出るワンド状の湾入部が多く形成される川づくりが必要である。

特 記 事 項

スジシマドジョウ類の分類・学名は現在混乱しているため、今回用いた種名・学名も不確定な形となっている。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
環境庁自然保護局編.1993.第4回自然環境保全基礎調査:動植物分布調査報告書(淡水魚類).環境庁.

アユカケ（カマキリ）

Cottus kazika

カサゴ目カジカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息域が中流域から下流域・河口域へと縮小の傾向にある。
生息個体数が減少傾向にある。

分布の概要

日本固有種で、太平洋側では神奈川県相模川以南、日本海側では秋田県雄物川以南に分布する。ただし、最近になって青森県の日本海側河川からも生息が確認された。
川の中流域の瀬に生息し、小魚など小動物を捕食する。降河回遊魚で、12～3月頃、河口付近の岩礁帯で産卵する。

県内の生息状況

四国では、愛媛県、高知県、徳島県に分布する。徳島県では吉野川、鮎喰川、園瀬川、勝浦川、那賀川、椿泊湾に流入する小河川、海部川、穴喰川などで確認されている。
吉野川では昭和30年代頃までは中流域の池田町や川島町まで遡上していたが、現在ではほとんどの個体は第十堰直下に溜まっており、ごくわずかの個体が柿原堰下に達することができる程度のものである。この傾向は他の河川においても同様で、生息が確認されるのは潮止め堰の直下付近である。

生存に対する 脅威・保護対策

遡上能力に乏しく、河口域にごく低い堰が作られてもその川では絶滅する危険が高い。流量がある程度以上ある河川では、潮止め堰直下にわずかながら純淡水域を生じるため、絶滅を免れているとみられる。回遊魚であるため、生活史の各段階における沿岸域を含めた生息環境の保全が必要である。上記の回遊経路の遮断以外では、流量の減少・水質汚濁とそれらに伴う底質環境の悪化、とくに瀬における有機性粒子の沈着が脅威となっていると考えられる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
佐藤陽一.1994.海部川水系の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(4).
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤 譲.1998.勝浦川の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(8).
高橋弘明・佐藤陽一・洲澤 譲.1997.椿泊湾流入河川の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(7).
徳島県.1978.環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査:動物分布調査報告書(淡水魚).

アカメ

Lates japonicus

スズキ目アカメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

絶滅危

選 定 理 由

生息地が限定されている。
生息個体数が少ない。

分布の概要

日本固有種で、宮崎県と高知県を中心に分布するほか、静岡県以南で散発的に見られる。黒潮の影響を直接受ける地域の沿岸や河口域に生息する。幼魚は河口やそれに連なる内湾のアマモ場で生育する。成魚は沿岸から河口にかけて移動しながら生活する。成魚は夜行性で、魚類などを捕食する。

県内の生息状況

四国では香川県を除く各県に分布する。高知県では安定的な個体群が存在するが、愛媛県における出現は散発的である。
徳島県における記録は、太平洋に面した海部郡にほぼ限られ、沿岸に設置された定置網によってまれに漁獲される程度である。現在まで確認されているのは由岐町阿部地先、日和佐町日和佐川河口域、牟岐町、海南町海老ヶ池、浅川湾、海部川河口とその地先、穴喰町那佐湾である(聞き取り調査を含む)。なお、海老ヶ池はかつては汽水池であったが、現在では水門で締め切られ淡水化されているため生息は不可能である。

生存に対する 脅威・保護対策

幼魚までの間は淡水の影響下にあるアマモ場に生息するため、とくにコアマモの群落が形成される環境の保全が重要である。海部郡でそのようなアマモ場が存在する場所は少なく、日和佐川と浅川湾、那佐湾程度である。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
佐藤陽一.1994.海部川水系の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(4).
徳島県.1978.環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査:動物分布調査報告書(淡水魚).
徳島淡水魚研究会編.1987.徳島県魚貝図鑑〈淡水魚編〉.徳島新聞社.

イドミミズハゼ

Luciogobius pallidus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

報不足

選 定 理 由

生息地が限定されている。
生息個体数が少ない。

分布の概要

日本固有種で、三重県以西の本州、四国、九州北部、および佐渡島に散発的に分布する。主として河川下流～河口域の淡水が浸透する砂礫中に生息する。本種の和名は、掘り抜き井戸から汲み上げた水に混入して発見されたためつけられたもので、このことからすれば、純淡水の浅い地下水中にも侵入することがあるようだ。詳しい生態は不明であるが、高知県では 10 月に流下仔魚が得られている。

県内の生息状況

四国では各県から記録がある。
徳島県では吉野川、勝浦川、椿川のいずれも河口域で確認されているが、生息数は少ない。また、聞き取り調査によれば、海部川下流域では、かつて手押しポンプで井戸水を汲み上げていると、本種と思われる魚が混入することがあったという。

生存に対する 脅威・保護対策

真水が浸透するような河口域の礫底河床が主要な生息場所（産卵場所？）と考えられる。水質・底質の汚濁や浚渫、堰などによる湧水の遮断、各種工事に伴う河床環境の劣化が脅威となる。

参 考 文 献

建設省徳島工事事務所 .1999. 平成 11 年度吉野川下流域における生物調査中間結果報告（速報）. 建設省徳島工事事務所記者発表資料 .
佐藤陽一 .1994. 海部川水系の魚類相 . 徳島県立博物館研究報告, (4).
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤 譲 .1998. 勝浦川の魚類相 . 徳島県立博物館研究報告, (8).
水産庁編 .1998. 日本の稀少な野生水生生物に関するデータブック . 日本水産資源保護協会 .
高橋弘明・佐藤陽一・洲澤 譲 .1997. 椿泊湾流入河川の魚類相 . 徳島県立博物館研究報告, (7).

ヒモハゼ

Eutaeniichthys gilli

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

自然度の高い生息環境を要求する。
河口域の開発に伴い生息個体数が減少している。

分布の概要

国内では青森県～西表島、国外では朝鮮半島、渤海、黄海に分布する。砂質を多く含む汚濁の少ない清浄な河口干潟に生息する。ヨコヤアナジャコ等の生息孔に隠れているか、砂に潜っていることが多いが、まれに水面近くを遊泳する姿を見かける。生活史の詳細については不明であるが、徳島県での産卵期は 5～8 月頃と推測され、寿命は 2 年以上と考えられている。動物プランクトンや珪藻類、小型の底生動物等を食べる。

県内の生息状況

四国では各県から知られているが、砂質の前浜干潟が発達しやすい瀬戸内海側に多い。
徳島県では吉野川、旧吉野川の河口域から記録されている。しかし、吉野川での分布は鮎喰川合流部より下流に、旧吉野川での分布は河口堰下流に限られており、両河川共分布域は狭い。ただし、吉野川河口域での生息数は多く、四国最大級の生息地となっている。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域の各種開発事業に伴う河床環境への影響が懸念される。吉野川では特に吉野川橋周辺の砂質干潟に多くみられるが、周辺の泥干潟では自然環境が良好であるにも関わらず全くみられない。このことから、本種は生息に適した底質の粒径を厳密に選択していることが推察される。したがって、人為的な流況の変化により底質の組成が変化すれば、本種の生息に重大な影響を及ぼすおそれがある。

参 考 文 献

道津喜衛 .1955. ヒモハゼの生活史 . 日本生物地理学会報, (16-19) .

タネハゼ

Callogobius tanegasimae

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が限定されており、個体数が少ない。

分布の概要

国内では三重県、和歌山県、四国、宮崎県、鹿児島県～西表島、国外ではフィリピンに分布する。淡水の流入する内湾や河口域の砂泥底に生息孔を掘ってすむが、ヨシの根塊や倒流木の間から見つかることもある。若魚とメスは体側に3～4本の明瞭な黒褐色の横帯を有するが、オスは成長すると各鰭が伸長し、体色が黒ずんで体側の横帯が不明瞭となる。動作は緩慢。

県内の生息状況

四国では高知県と、愛媛県、徳島県の太平洋側から記録されている。徳島県内では日和佐川河口域が最大の生息地であるが、分布範囲は狭い。

生存に対する 脅威・保護対策

内湾、河口域の開発と河川改修が最大の脅威となっている。本種の生息地となるワンドや抽水植物帯、干潟等の保全、復元が重要である。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

カワアナゴ

Eleotris oxycephala

スズキ目カワアナゴ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

近年生息数が減少している。

分布の概要

国内では茨城県～種子島、五島列島、国外では韓国と中国に分布する。感潮域～河川下流域、水路で海と連絡した池に生息する。夜行性で強い捕食性を示し、成魚は小魚やエビ、カニ、ゴカイ等を食べる。単独で生活し、幼魚は抽水性植物の根元や水草群落の中、成魚は石や流木の下に潜む。高知県では8～9月に、巨石の下やブロックの間等に産み付けられた付着卵を保護するオス親が観察される。卵径、孵化仔魚のサイズは魚類中最小の部類に入る。仔魚は海域で生活し、全長10mm前後で着底すると考えられている。

県内の生息状況

四国では各県から記録されている。徳島県では旧吉野川以南の各河川下流域に広く分布するが、紀伊水道側での生息数はあまり多くない。海南町では淡水の流入する塩性湿地にもみられるが、潮止め堰堤によって遡上を妨げられている河川も多い。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修に伴う生息地の消失が最大の脅威である。本種の生息には水際の抽水植物帯やえぐれ、巨石等、隠れ場所となるものが存在し、餌となる小魚やエビ等が豊富な環境が必要である。

特 記 事 項

四国太平洋側では本種他、同属のチチブモドキ、オカメハゼ、テンジクカワアナゴが確認されている。本種を初めとしたカワアナゴ属魚類は形態的に互いに良く似ているため、同定の際には注意が必要である。

参 考 文 献

道津善衛・藤田矢郎.1959.カワアナゴの生態・生活史.長崎大学水産学部研究報告,(8).
川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

サツキハゼ

Parioglossus dotui

スズキ目オオメワラスボ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地、個体数共に少ない。

分布の概要

国内では石川県・千葉県～八重山諸島、国外では済州島に分布する。
淡水の影響を受ける内湾や河口域に生息する。カキの多く付着した岩礁や漁港内、堤防の周辺に見られ、群をなして中層を遊泳し、動物プランクトンを食べる。動作は俊敏で人が近づくと素早く逃げる。四国太平洋側での産卵期は5～7月頃と考えられ、カキ殻や他の二枚貝の殻等に付着卵を産む。生涯底生生活に移行しない。寿命は2年以上と考えられている。

県内の生息状況

香川県を除く3県から記録されているが、瀬戸内海側では少ない。
徳島県では、椿川や牟岐川など、主として橘湾以南の太平洋側でみられる。

生存に対する 脅威・保護対策

内湾や河口域の開発に伴う生息環境の破壊が脅威となっている。また、漁港等の生息地では船舶燃料やゴミの投棄による水質の汚濁も問題となる。体色が美しいことから、観賞用に捕獲され販売されることがある。

参 考 文 献

道津善衛.1954. サツキハゼ（新称）の生活史. 学藝雑誌, 15(4).
川那部浩哉・水野信彦編.1995. 日本の淡水魚, 第2版. 山と溪谷社.

ベニツケサツキハゼ

Parioglossus philippinus

スズキ目オオメワラスボ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地、生息個体数ともに少ない。

分布の概要

国内では神奈川県、和歌山県、徳島県、高知県、西表島、国外ではマダガスカル、インド、西太平洋に広く分布する。
最近になって国内での生息が確認された種であることから、生態についてはほとんど不明である。サツキハゼと混合群を形成していることが多い。体側斑紋の違いと鰓孔の大きさによりサツキハゼと区別できるが、成長したオスでは腹鰭が著しく伸長するため容易に見分けられる。和名は成熟したオスの頭部が紅色に染まることにちなむが、メスやオスの小型個体ではむしろサツキハゼよりも体色に赤みが少なく、全体に黄緑色がかって見える。

県内の生息状況

四国では高知県、徳島県から記録されている。最近、著者らにより高知県浦ノ内湾にまとまった個体群が存在することが確認された。
徳島県では牟岐町の海域から知られているが、県南部の河川河口域にも生息する可能性がある。

生存に対する 脅威・保護対策

内湾や河口域の開発に伴う生息環境の破壊が脅威となっている。また、漁港等の生息地では船舶燃料やゴミの投棄による水質の汚濁も問題となる。体色が美しいことから、観賞用に捕獲され販売されることがある。

特 記 事 項

サツキハゼと形態的に類似しており、混合群を形成していることが多いため、過去の調査では両種が混同されて報告されている可能性がある。

参 考 文 献

鈴木寿之.1991. 日本初記録のベニツケサツキハゼ（新称）. I.O.P.DIVING NEWS, 3(1).
高橋弘明・岡本充.1998. 浦ノ内湾のハゼ科魚類Ⅱ. 南予生物, (10).

ウキゴリ

Gymnogobius urotaenia

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

在来個体群はいずれの生息地においても減少傾向にある。
近年、他地域からの移入個体群が分布を広げつつある。

分布の概要

国内では北海道、本州、九州、サハリン、択捉島、国後島、国外では朝鮮半島に分布する。
かつてウキゴリ淡水型と呼ばれていたように、おもに河川中流域や周辺水路、湖沼に生息する。成魚は単独で石や水中に張り出した木の根の間等に隠れて生活する。大型のオスは口裂が著しく大型化し、頭部がしゃくれたような形状となる。強い捕食性を示し、水生昆虫や甲殻類の他、大型個体は小魚もよく食べる。

県内の生息状況

四国では全県から記録されているが、愛媛県と高知県における分布は移入によるものと考えられる。徳島県では吉野川、那賀川、椿川、伊勢田川から記録されている。吉野川では三加茂町付近から下流の本流でみられるが特に柿原堰下流に多い。なお、吉野川水系銅山川の柳瀬ダム湖（愛媛県）には本種の陸封個体群がみられる。これは移入と思われるが、在来分布の可能性も残る。池田ダム湖にも同様の個体群が生息する可能性がある。

生存に対する 脅威・保護対策

清浄な水質を好み、本流路よりも湧出水のあるワンドやクレークに集まる傾向があり、堰堤直下の伏流水湧出部にみられることも多い。また、身を隠したり、餌となるヌマエビ類や水生昆虫の生息場所となる抽水植物帯の存在も重要である。本種の場合、さらに近年急速に四国内に広がりつつある移入個体群により、在来個体群が影響を受けるおそれがあり、最大の脅威となっている。

特 記 事 項

スミウキゴリ (P.138) とは、第一背鰭後端に黒色斑を有する他、体側や尾鰭の斑紋パターンの違いにより見分けられるが、ウキゴリの移入個体とは外見上判別が困難。

参 考 文 献

高橋弘明・佐藤陽一・洲澤 譲 .1997. 椿泊湾流入河川の魚類相 . 徳島県立博物館研究報告, (7).
徳島淡水魚研究会編 .1987. 徳島県魚貝図鑑〈淡水魚編〉. 徳島新聞社 .

マサゴハゼ

Pseudogobius masago

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

地域個体群

選 定 理 由

生息地が限定されている。
河口域、沿岸域の開発に伴い生息地の多くが将来的に失われるおそれがある。

分布の概要

国内では茨城県～九州、南西諸島、国外では朝鮮半島に分布する。
河川河口域や淡水の流入する内湾の砂泥底に生息し、干潮時に形成される浅い水たまり内で多くの個体が観察される。小型の底生動物やデトリタス等を食べる。産卵期は5～9月中旬と長期に及ぶ。産卵生態については不明であるが、生息環境の特徴から特定の産卵床をつくらず、砂泥底の表面に直接産卵すると考えられている。

県内の生息状況

四国では4県ともに分布する。徳島県では吉野川と勝浦川から知られている。吉野川では生息数が少なく、生息状況の詳細については明らかでないが、勝浦川では河口域に発達するヨシ帯に囲まれた泥干潟に比較的多くみられる。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域の開発に伴う干潟やヨシ帯の減少が最大の脅威であろう。本種は有機的汚濁に弱く、干潟環境の汚染が進行するといち早く姿を消すとされている。良好な河口干潟を保全することが最も重要である。

参 考 文 献

道津善衛 .1958. マサゴハゼの生活史 . 長崎大学水産学部研究報告, 16(3).
川那部浩哉・水野信彦編 .1995. 日本の淡水魚, 第2版 . 山と溪谷社 .
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤 譲 .1998. 勝浦川の魚類相 . 徳島県立博物館研究報告, (8).

※絶滅のおそれのある地域個体群：「沖縄島のマサゴハゼ」

ヤリタナゴ

Tanakia lanceolata

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。
生息河川が紀伊水道側に限定されている。

分布の概要

北海道と南九州を除く日本各地と朝鮮半島西岸に分布する。
河川の中・下流の緩流域、細流、湖沼に生息する。砂底または砂礫底の岸近くに多い。産卵期は福岡県で3～6月、岡山県で4～8月、徳島県で4～6月。ドブガイ、イシガイ、マツカサガイなどの二枚貝の鰓に産卵する。雑食性。

県内の生息状況

四国4県ともに在来分布であるが、一部移入による水域もある。底質環境の悪化などによる産卵床となる二枚貝の減少や、オオクチバスなどの肉食性魚類の侵入により、各地で減少傾向にある。徳島県では旧吉野川や鮎喰川、飯尾川などを含む吉野川水系から桑野川や打樋川を含む那賀川水系までの紀伊水道側の河川下流域に分布する。

生存に対する 脅威・保護対策

圃場整備事業や土地開発にともなう水路・細流の構造変化や消失、河川・湖沼の水際の改修、オオクチバスなどの肉食性魚類の移入、水質汚濁、農薬などが脅威となる。
産卵床となる二枚貝が生息できるような良好な環境を保つことが必要である。また、オオクチバスなどの肉食性魚類の移入を阻止する必要がある。

特 記 事 項

各地域による形態の変異が比較的大きい。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と渓谷社.
中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
徳島淡水魚研究会編.1987.徳島県魚貝図鑑<淡水魚編>.徳島新聞社.

カワムツA型

Zacco sp.

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が紀伊水道側の一部の河川に限定されている。

分布の概要

中国地方と四国、九州北部に分布する。関東地方における分布は移入によるものである。
下流域の流れの緩やかな場所を好む。また、本川よりも規模の小さな支川や水路に多く出現する傾向がある。

県内の生息状況

四国では瀬戸内側と紀伊水道側の河川だけに分布する。徳島県下では吉野川水系と勝浦川水系からのみ知られている。現在のところ、吉野川水系の宮川内谷川下流、飯尾川、鮎喰川水系の以西用水、勝浦川水系の神田瀬川や勝浦盆地への流入支川などから確認されている。
同一河川内にカワムツB型と共存する場合、上流側にB型が、下流側にA型が生息する傾向がみられる。産卵はB型と同様、初夏に流れのある礫底で行う。B型よりも大きな、明瞭な群れを作ることが多く、B型ほど物陰に隠れる性質は強くない。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修による瀬・淵構造の消失、水際植物や抽水植物の減少が脅威と考えられる。なお、水質汚濁に対しては近縁種カワムツB型よりも強いようである。

参 考 文 献

中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
佐藤陽一.1995.宮川内谷川(吉野川水系)の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(5).
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤 譲.1998.勝浦川の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(8).

モツゴ

Pseudorasbora parva

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

在来分布は関東以西の本州、四国、九州であるが、現在では移入により北海道から琉球列島まで広く分布する。国外では朝鮮半島、台湾、沿海州からベトナムにかけて分布する。川の下流域や湖沼、それに連なる水路や細流の泥底の淀みに多く生息する。水質の悪化には強い。産卵期は3～7月。ヨシなどの茎や石の表面に産卵し、雄が保護する。雑食性。

県内の生息状況

四国には4県ともに分布する。移入による分布も多いと思われるが詳細は不明である。徳島県では紀伊水道側では旧吉野川と鮎喰川を含む吉野川、園瀬川、勝浦川、那賀川、阿南市の打樋川と蒲生田大池、太平洋側では海南町の海部川など、いずれも下流域周辺の用水路や池に分布する。

生存に対する 脅威・保護対策

オオクチバスなどの魚食性魚類の移入、溜池や細流の埋め立て、河川湖沼の水際の改修などが脅威となる。
オオクチバスの移入の阻止、産卵場となり、また魚食魚からの避難が可能となる多様な水際の保全・復元が必要である。

特 記 事 項

各地域による形態の変異が比較的大きく、遺伝的な分化も確認されている。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と渓谷社.
中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
徳島淡水魚研究会編.1987.徳島県魚貝図鑑<淡水魚編>.徳島新聞社.

ムギツク

Pungtungia herzi

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が紀伊水道側の一部の水系に限定されている。

分布の概要

福井県・岐阜県・三重県以西の本州と四国北東部、九州北部に分布する。国外では朝鮮半島に分布する。
中～下流域の淵やトロに多く生息する。動物中心の雑食性だが、幼魚は藻類もよく食べる。産卵期は5～6月で、卵を岩や抽水性植物の茎などに産み付ける。オヤニラミやドンコとの共存河川では、卵を保護するこれらの魚種に托卵する、魚類としてはたいへん珍しい習性をしている。驚いたときや水温が低いなど条件の悪いときには石の隙間に隠れていることが多い。

県内の生息状況

四国における在来分布は香川県と徳島県のみであるが、現在では愛媛県と高知県（仁淀川水系）に移入され、定着している。
徳島県では紀伊水道側の水系だけに分布し、北は園瀬川、南是那賀川水系の桑野川まで分布する。園瀬川では河口域で吉野川水系の新町川水系と合流しているほか、吉野川支川の鮎喰川とは中流域の低地帯で隣接しているにもかかわらず、園瀬川以外の吉野川水系には本種はまったく生息しない。また、地史的にも密接な関係が予想される桑野川のすぐ南の福井川や椿川にも生息しない。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修による河床の平坦化、それに伴う隙間の減少が脅威である。
本種は上記の分布の特異性から動物地理学的に重要である。そのため移植放流による遺伝学的攪乱には最大限の注意が必要である。

参 考 文 献

馬場玲子.1990.ムギツクのオヤニラミへの托卵について.淡水魚,(3).
宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦.1976.原色日本淡水魚類図鑑,全改訂新版.保育社.

イトモロコ

Squalidus gracilis gracilis

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布域が紀伊水道側河川に限定されている。
生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

在来分布は濃尾平野以西の本州、四国北東部、九州北部、長崎県壱岐島・福江島であるが、神奈川県や高知県など各地に移入により分布を広げている。
川の中～下流域や用水路、細流などの、砂～砂礫の川底近くに群泳していることが多い。産卵期は5～6月。コウライモロコなど同属の魚と共存する場合には、流れの速い上流側に本種が生息する傾向がある。また、河川改修などで川幅の広い流れの緩やかな水際の単調な場所が増えると、コウライモロコの生息域が増加し、逆にイトモロコの生息域が減る傾向がある。雑食性。

県内の生息状況

四国における在来分布は、香川県と徳島県である。現在は移入により高知県にも分布するようになった一方で、在来分布域では減少傾向にある。なお、愛媛県にも分布するが、在来分布かどうかはわかっていない。
徳島県では、旧吉野川と鮎喰川を含む吉野川水系から阿南市の福井川までの紀伊水道側の河川に分布する。

生存に対する 脅威・保護対策

河川改修などによる生息空間構造の単純化、水質の汚濁、オオクチバスなどの魚食性魚類の移入が脅威となる。

特 記 事 項

各地域による形態の変異が大きい。朝鮮半島西岸には近縁亜種のホソモロコ *Squalidus gracilis majimae* が広く分布している。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
徳島淡水魚研究会編.1987.徳島県魚貝図鑑<淡水魚編>.徳島新聞社.

コウライモロコ

Squalidus chankaensis subsp.

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布域が紀伊水道側河川に限定されている。
生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。

分布の概要

濃尾平野、和歌山県有田川から広島県芦田川までの本州瀬戸内海側、近畿地方由良川から中国地方江の川までの本州日本海側、および四国東部に分布する。国外では朝鮮半島西岸に分布する。
大きな川の中・下流域に生息する。産卵期は5～7月。産卵生態は不明。流れの緩やかな平坦な砂泥から砂礫の川底で群泳していることが多い。雑食性。

県内の生息状況

現在では四国の4県ともに分布するが、徳島県のみが在来分布であるとされている。香川県へは、吉野川の池田ダム湖から取水されている香川用水を通じて侵入した。愛媛・高知両県における分布は、移入によるものと考えられている。
徳島県では吉野川から那賀川までの紀伊水道側の各水系に分布する。
なお、琵琶湖から移入されたと考えられる近縁亜種スゴモロコもこれらの水系に分布しているが、両亜種間の交雑については不明である。

生存に対する 脅威・保護対策

水質汚濁やオオクチバスなどの肉食性魚類の移入、近縁亜種の移入による競合や遺伝的攪乱などが脅威となる。

特 記 事 項

吉野川水系において過去に近縁種のデメモロコが移入種として記録されているが、徳島県内で確実に本種に同定される個体は確認されていない。コウライモロコの誤認である可能性が高い。ただし、吉野川水系銅山川の柳瀬ダム湖（愛媛県）からは、琵琶湖産アユ種苗に混入して移入されたと思われるデメモロコの標本が得られている。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編．1995．日本の淡水魚，第2版．山と溪谷社．
日本水産資源保護協会編．1996．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅲ）．日本水産資源保護協会．
佐藤陽一．1998．勝浦川水系の魚類相．徳島県立博物館研究報告，(8)．
徳島県．1978．環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（淡水魚）．
徳島淡水魚研究会編．1987．徳島県魚貝図鑑＜淡水魚編＞．徳島新聞社．

サツキマス（アマゴ降海型）

Oncorhynchus masou ishikawae

サケ目サケ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が限定されており、生息個体数が少ない。
良好な環境にある河川の指標となる。

分布の概要

静岡県以南の本州の太平洋・瀬戸内海側、四国、大分県、宮崎県に分布する。生息数は全国的に激減している。
産卵を河川上流域で行う遡河回遊魚で、産卵期は9月下旬～11月上旬。稚魚は翌年4月頃から降河しはじめ、中流域でスモルト（銀毛）となる。降海は12～2月頃。その後沿岸域で成長し、4～6月頃遡河する。河川残留型（アマゴ）は水温が20℃以下の冷水を好む。

県内の生息状況

四国では香川県を除く各県に分布する。徳島県では吉野川、那賀川、海部川だけに分布する。どの河川でも、生息数は少なく、5月頃、河口や下流域でまれに釣れる程度である。

生存に対する 脅威・保護対策

生活史の中で河川上流域と沿岸域を回遊するため、それらのどの地域でも本種の生息に適した環境になければ生息できない。そのため、本種の生息する河川は、良好な環境にある河川といえる。体サイズが大きいため（標準体長25～35cm）、生息は、餌生物の豊富なある程度の規模以上の河川に限られる。水質が清浄であることはもちろんであるが、もっとも重要なのは、回遊経路を遮断するダムや堰、砂防堰堤などの人工構造物がないことである。堰には適切な魚道を設置したり、砂防堰堤はスリット式にするなど、遡上や降河を妨げない構造とする必要がある。

特 記 事 項

現在では他水系産の種苗の放流が至るところで行われた結果、どの河川のサツキマスも遺伝的にはすでに攪乱を受けた状態となっており、在来のままの自然個体群はほとんど残っていないと考えられる。それでもなおかつ、本種が生息できる河川の環境の尊重といったその保全が望まれる。

参 考 文 献

佐藤陽一・1994. 海部川水系の魚類相・徳島県立博物館研究報告, (4).
水産庁編・1998. 日本の稀少な野生水生生物に関するデータブック・日本水産資源保護協会・

ガンテンイシヨウジ

Hippichthys (Parasyngnathus) penicillus

トゲウオ目ヨウジウオ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息環境が汽水域の一部に限定されている。
良好な河口環境の指標となる。

分布の概要

紀伊半島から種子島、国外ではアラビア海、東部インド洋～西部太平洋に分布する。
河口に隣接する海域および河口でみられるが、塩分濃度の比較的高い河口域下部に生息していることが多い。岩や流倒木等の物陰や海草の間にひそんでいる。徳島県内での産卵期は7～9月頃である。大型の雄は育児のうに多数の卵を抱え、卵の孵化後も一定期間にわたって仔魚を保護する。

県内の生息状況

四国各県に分布する。
徳島県では吉野川と旧吉野川、勝浦川、那賀川、椿川などの河口域で確認されている。生息数は多くはないが、県内河川で確認されるヨウジウオ科魚類4種（他にテングヨウジ、カワヨウジ、ヨウジウオ）の中ではもっとも普通にみられる。本種の県内河川における出現は3～11月と比較的長期に及ぶこと、若魚期以上の各成長段階の個体が確認されることから、定着・再生産を行っている可能性が高い。他の3種の再生産については不明である。

生存に対する 脅威・保護対策

水質の汚濁や、河口域の改修、浚渫等が脅威となる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編・1995. 日本の淡水魚, 第2版・山と溪谷社・
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤 譲・1998. 勝浦川の魚類相・徳島県立博物館研究報告, (8).

スミウキゴリ

Gymnogobius sp. 1

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

清流性が強く河川環境の良否を判断する指標の一つとなる。

分布の概要

北海道日高地方～屋久島、国外では朝鮮半島に分布する。かつてウキゴリ汽水型と呼ばれていたように、おもに河川下流域に生息するが、河川によってはかなり上流域にまで遡上する場合もある。徳島県内でも、春に群れを成して中層を遊泳しながら河川を遡上する若魚がみられる。成魚は単独で石や水中に張り出した木の根の間等に隠れて生活する。成熟したメスは腹部が黄色に染まる。動物食性。

県内の生息状況

四国では香川県を除く 3 県から記録がある。徳島県では吉野川以南の各河川でみられるが、特に太平洋側に多く、海に直接流れ込むような細流にも生息している。なお、吉野川での本種の分布は石井町第十堰直下流までで、これより上流で確認されたのはすべて別種のウキゴリであった。

生存に対する 脅威・保護対策

本種は清浄な水質を好み、生息地では本流路よりも湧出水のあるワンドやクリークに集まる傾向があるほか、堰堤直下の伏流水湧出部にみられることも多い。また、身を隠したり、餌となるヌマエビ類や水生昆虫の生息場所となる抽水植物帯の存在も重要である。このような河川環境を保全・再生することが本種の保護上望ましい。

特 記 事 項

ウキゴリ (P.132) とは、第一背鰭後端に黒色斑を欠くことその他、体側や尾鰭の斑紋パターンの違いにより見分けられる。ウキゴリと同所的に出現する場合もあるので注意が必要である。

参 考 文 献

高橋弘明・佐藤陽一・洲澤 譲. 1997. 椿泊湾流入河川の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (7).

ニクハゼ

Gymnogobius heptacanthus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息域が河口域や内湾に限定されている。
開発に伴い生息環境が悪化、減少するおそれがある。

分布の概要

国内では北海道～九州、国外では沿海州、朝鮮半島、中国に分布する。波の穏やかな内湾の岸近くや河口域に生息し、砂泥質でアマモ類の繁茂する水域を好む。群れで中層を遊泳し、ヤムシ類や甲殻類幼生等の動物プランクトンを食べる。著者の観察によると、驚くと砂に潜る行動をとる。産卵生態については不明であるが、産卵期は九州地方で 2 ～ 5 月と推定されている。1 年で成熟し、産卵後は死亡する年魚と考えられている。

県内の生息状況

四国では本県その他、愛媛県からも記録されている。四国周辺の瀬戸内海地方に多いことから、香川県にも生息する可能性が高い。徳島県内では、吉野川、旧吉野川、今切川、沖洲川の各河口域から確認されているが、紀伊水道側の諸河川と沿岸域には広く分布するものと思われる。吉野川河口域における分布はエドハゼ、ヒモハゼとほぼ同様で、吉野川橋付近の砂泥質の干潟での生息密度が最も高い。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域や沿岸域の開発に伴う生息環境の悪化と減少が脅威となる。本種はアマモ場の代表的生物群集の一つであり、沿岸域や河口域の自然環境の健全性を示す指標となる。

参 考 文 献

道津善衛. 1984. ニクハゼの生態・生活史およびホルモン処置による採卵. 長崎大学水産学部研究報告, (55).
佐藤陽一. 1991. 徳島市都市河川の魚類相. 徳島県立博物館研究報告, (1).

ビリンゴ

Gymnogobius castaneus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が比較的限定されている。

分布の概要

国内では北海道～屋久島、国外ではサハリン、色丹島、沿海州、朝鮮半島、中国に分布する。河川河口域や汽水湖の砂泥底に生息し、淡水域にはほとんど侵入しない。通常、ヨシ帯の根元周辺や砂泥底でじっとしていることが多いが、中層に群れを成して遊泳することもある。動物食性に偏った雑食性。産卵期は南四国では1～3月頃で、メスの体色が著しく黒化する婚姻色を現す。産卵はヨコヤアナジャコ等の生息孔内に行われ、オス親が孵化時まで卵を保護する。

県内の生息状況

四国では全域に広く分布する。

徳島県内では吉野川、那賀川、勝浦川等、河口域がよく発達する河川に生息するが、太平洋側の小河川等では少ない。また、汽水域に生息するため分布が潮止堰直下までの範囲に限られていることが多い。ただし、上記3河川での生息数は多い。特に5月頃の吉野川第十堰直下流では若魚が大群で中層を遊泳し、全長10～20cmのスズキがこれを盛んに捕食する姿が観察できる。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域における各種開発事業による総合的な生息環境の悪化が脅威となる。

参 考 文 献

道津善衛.1950.ビリンゴの生活史.魚類学雑誌,3(4,5,6).
川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

アシシロハゼ

Acanthogobius lactipes

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内では分布があまり知られていない。

分布の概要

国内では北海道～九州、国外ではオホーツク海、サハリン、沿海州、朝鮮半島、中国に分布する。河川河口域や淡水の影響を受ける内湾の潮間帯に生息し、かなりの広塩性を示す。底質に対する選択性も弱く、砂泥質～砂礫質の広い範囲にみられる。幼魚は動物プランクトンやデトライタスを、成魚はゴカイや小型の甲殻類等を食べる。産卵期は4～6月で、通常が生息地内にある石やイタボガキ等の殻の裏面に付着卵を産む。稚魚は全長13mm前後で着底生活に入る。

県内の生息状況

四国4県全てから記録されているが、瀬戸内海側に多く、太平洋側での分布は限られている。

徳島県では吉野川、勝浦川のみから知られている。吉野川河口域では鮎喰川合流部付近に、勝浦川では野神橋下流付近にみられるが、生息数は少ない。ただ、幅広い汽水域環境に適応可能な本種の生態を考慮すると、他河川の河口域や沿岸域にも生息する可能性が高く、今後調査する必要がある。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域や沿岸域の開発に伴う底質、水質の悪化が脅威である。

参 考 文 献

道津善衛.1959.アシシロハゼの生態・生活史.長崎大学水産学部研究報告,(8).
藤田光・細川昭雄・中瀬宏孝.1970.徳島市の魚類分布.総合学術調査報告「徳島」郷土研究発表紀要,(15).
佐藤陽一・高橋弘明・洲澤譲.1998.勝浦川の魚類相.徳島県立博物館研究報告,(8).

ボウズハゼ

Sicyopterus japonicus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

河川環境の悪化に伴い減少傾向にある。

分布の概要

国内では茨城県～西表島、国外では台湾に分布する。
河川中・上流域に生息する。ほとんど完全な藻類食性で、石の表面の付着藻類を独特の形状の口器を使ってなめとるようにして食べる。産卵期は初夏頃と考えられており、大石の裏等に小さな卵を多数産み付ける。孵化後の仔魚はただちに海に流下し、沿岸域で全長 25 ～ 30mm ほどに成長した後、河川に遡上する。遡上力が驚異的に強く、口と吸盤を使って垂直な岩の表面すら登ることが可能。春～夏にかけては動作が敏捷で捕らえ難いが、冬季は石の下でほとんど動かずじっとしている。

県内の生息状況

四国では香川県を除く 3 県から記録されている。瀬戸内海側の河川からは記録が少ない。太平洋側と宇和海側では全域に分布する。
徳島県ではほぼ全域に分布するが、紀伊水道側における生息個体数は少ない。蒲生田岬以南の太平洋側河川には多くみられる。

生存に対する 脅威・保護対策

本種は付着藻類を専食することから、家庭排水等の汚濁負荷量増加に伴う河川の富栄養化や各種土木工事による河床へのシルト堆積が進行すると顕著に減少する。このため、本種個体群の健全性を河川環境の良否を判定する一指標として利用することが提案されている。

特 記 事 項

従来、四国瀬戸内海側の河川からは知られていなかったが、近年愛媛県肱川に生息することが確認された。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編 .1995. 日本の淡水魚 , 第 2 版 . 山と溪谷社 .
高知大学黒潮圏研究所編 .1994. 黒潮と土佐 . 高知新聞社 .
徳島淡水魚研究会編 .1987. 徳島県魚貝図鑑〈淡水魚編〉. 徳島新聞社 .

ヒナハゼ

Redigobius bikolanus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内における生息地、個体数が比較的少ない。

分布の概要

神奈川県～西表島、国外では台湾、セイシャル、西および南太平洋に分布する。
河川河口域に生息する。転石や流木、ブロックの周辺、アマモ場、ヨシ帯等であまり動かずに定位置している姿が観察される。動物プランクトンやデトライタス等を食べる。産卵期は四国西南部で 7 ～ 9 月とされている。成熟したオスは頭部が肥大し、口裂が著しく大型化する。

県内の生息状況

四国では 4 県ともに分布する。太平洋側と宇和海側では全域に分布するが、紀伊水道側、瀬戸内海側では分布が限られており、生息数も少ない。
徳島県では吉野川以南の諸河川から知られているが、椿川以南の太平洋流入河川に多い。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域の開発などによる生息環境の減少と消失が脅威となる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編 .1995. 日本の淡水魚 , 第 2 版 . 山と溪谷社 .
環境庁編 .1984. 第 2 回自然環境保全基礎調査（緑の国勢調査）動物分布調査（淡水魚類）報告書 . 大蔵省印刷局 .
徳島淡水魚研究会編 .1987. 徳島県魚貝図鑑〈淡水魚編〉. 徳島新聞社 .

キララハゼ属の一種(スジハゼ類)

Acentrogobius sp.

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が限定されている。
良好な自然環境が保たれた河口干潟にすむ。

分布の概要

北海道～西表島、国外では沿海州、朝鮮半島、中国に分布する。
浅海域～河口の砂泥底に生息するが、生息場所により形態の異なる 3 グループが存在する。河口域の泥干潟に生息するものはテッポウエビ類の生息孔に隠れていることが多く、共生関係にあることが示唆される。

県内の生息状況

四国では 4 県から記録されているが、前述の 3 タイプが含まれている可能性があり、各タイプごとの分布状況については不明。
徳島県では各河川の河口域および沿岸域から知られている。河口域に生息するタイプは吉野川と勝浦川の泥干潟に多い。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域の開発による生息環境の減少と消失が脅威となる。

特 記 事 項

前述のように問題を抱えた種群であり、早期の分類学的解決が望まれると共に、各タイプごとの生態が明らかにされるべきである。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
島村喜一.1993.スジハゼの分類学的基礎研究.日本大学大学院農学研究科博士前期課程論文.

ゴクラクハゼ

Rhinogobius giurinus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

河川下流域の開発に伴い減少傾向にある。
移入個体群が一部地域に侵入している。

分布の概要

国内では秋田県、茨城県～南西諸島、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。
河川下流域～汽水域及び汽水湖の砂礫底に生息する。砂の多い底質を好み、よく砂に潜る。雑食性で水生昆虫や小型甲殻類、デトライタス、糸状藻類等を食べる。産卵期は 7 ～ 10 月で、石の裏面に付着卵を産む。孵化した仔魚は沿岸域で生活し、全長 20 ～ 30mm に成長して河川を遡上する。

県内の生息状況

四国では全域に分布し、徳島県でも各河川から記録されている。
ただし、ある程度感潮域の発達する中規模以上の河川に多く、極小河川での分布は波の穏やかな湾に流入する河川に限られる。また、蒲生田大池、海老ヶ池等の海に近い淡水の流入する池（もしくはかつて海と連続していた池）には陸封個体群もみられる。ところが、近年吉野川水系の早明浦ダムや柳瀬ダムを初めとしたダム湖には、アユ等の放流用種苗に混入して他県から侵入したと思われる陸封個体群が定着している。これらは周辺の河川にも分布を広げており、現在高知県本山町や土佐山田町の吉野川本・支流では陸封型のゴクラクハゼが普通にみられる。今後、これらは池田ダム湖下流の吉野川本流にも分布を広げる可能性があり、在来個体群への圧迫や交雑が懸念される。なお、同様の問題はトウヨシノボリ、シマヨシノボリ、ウキゴリでも生じており、留意する必要がある。

生存に対する 脅威・保護対策

基本的に河川純淡水域下部～感潮域という狭い範囲に生息することから、河川下流域の開発に伴う生息環境の悪化が脅威となる。また、移入個体群の侵入による遺伝的攪乱の危険性もある。

特 記 事 項

大陸産の個体群は国内産のものと色斑や形態が異なることが知られており、今後の研究によっては別種となる可能性もある。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

ルリヨシノボリ

Rhinogobius sp. CO

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布が比較的限定されている。

分布の概要

北海道～九州、国外では済州島に分布する。

河川中・上流域の早瀬や淵の流れ込み部分に生息する。比較的流れの短い河川を好む傾向がある。水生昆虫等を食べる。産卵期は5～7月で、メスが積極的に求愛行動をとることが知られている。孵化した仔魚は海に流下し、浅海域で生活した後、全長15～20mm程に成長して河川を遡上する。

県内の生息状況

四国では香川県を除く3県から記録されていたが、最近香川県からも少数ながら発見されている。一般に太平洋側と宇和海側に多く、瀬戸内海側、紀伊水道側では少ない。徳島県内でも、阿南市椿川以南の太平洋側河川に広く分布する。

生存に対する 脅威・保護対策

県内では比較的限られた河川に分布し、かつ生息河川が小河川であることが多いため、改修等による影響を受けやすいと考えられる。

特 記 事 項

本種は従来、小河川に集中して分布する傾向が知られていたが、近年では四国太平洋側の四万十川、仁淀川、物部川、奈半利川といった大河川でもよく目にするようになった。また、オオヨシノボリと共存する河川では、改修に伴い淵が浅く、早瀬の流れが緩くなる等の物理環境変化が生じると、オオヨシノボリが減少し、本種が増加する傾向がみられる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

水野信彦.1976.ヨシノボリの研究Ⅲ.四国と九州での4型の分布.生理生態,17.

水野信彦・上原伸一・牧倫郎.1979.ヨシノボリの研究.Ⅳ.4型共存河川でのすみわけ.日本生態学会誌,29.

クロヨシノボリ

Rhinogobius sp. DA

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

分布が比較的限定されている。

分布の概要

千葉県、山形県～南西諸島に分布する。

基本的な生態、生活史はルリヨシノボリとほぼ同様。本種は河口近くからすぐに溪流的な河川形態となる小河川に好んで生息する。他のヨシノボリ類と共存する場所では流れの緩やかな淵尻や平瀬に多くみられる。

県内の生息状況

四国では各県から記録されている。特に太平洋側と宇和海側に多い。

徳島県内では椿川および海部郡内の諸河川に広く分布する。本種は太平洋に面した急斜面を流れ下る川幅50cm未満の沢にすら遡上する。

生存に対する 脅威・保護対策

生息河川はいずれも小規模なものであるため、改修等による生息環境の悪化や破壊が生じやすい。

特 記 事 項

カワヨシノボリと分布が重ならないことで知られていたが、椿川では両種が同所的にみられる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

水野信彦.1976.ヨシノボリの研究Ⅲ.四国と九州での4型の分布.生理生態,17.

水野信彦・上原伸一・牧倫郎.1979.ヨシノボリの研究.Ⅳ.4型共存河川でのすみわけ.日本生態学会誌,29.

トウヨシノボリ縞鰭型

Rhinogobius sp. OR

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

近年、生息地の多くが改修や埋め立てにより失われた。
近縁種の移入により生態的圧迫を受け、移入種と置き換わってしまった生息地も出てきた。

分布の概要

近畿～中国地方および四国の瀬戸内海側に分布する。濃尾平野と琵琶湖の個体群は縞鰭型と同じ集団であるか否か不明。国外では韓国に分布するとされている。
河川中・下流域に隣接したワンドやため池、堀等の止水的環境に生息する。他のヨシノボリ類と異なりよく中層を遊泳するため、成魚では胸鰭が大型化し、逆に腹鰭の吸盤は小型化する。オスの第一背鰭棘は伸長せず、第二背鰭の中程が最も高くなる。また第二背鰭の外縁に白い縁取りがある。頭部感覚管が不完全な個体が多いが変異がある。通常、石や杭等の陰に付着卵を産むが、泥の表面に直接産み付けることも多い。

県内の生息状況

四国では現在、香川県と徳島県から記録されている。
徳島県では吉野川下流域と旧吉野川周辺の支流や池、那賀川水系打樋川、桑野川から記録されている。オオクチバス、ブルーギル、他地域産のトウヨシノボリが侵入していない場所には高密度に生息するが、これらが侵入すると姿がみられなくなる。

生存に対する 脅威・保護対策

生息環境が池や沼等を中心としているため、埋め立てや改修による影響を受けやすい。さらに、他地域産のトウヨシノボリや本種を捕食するオオクチバス、ブルーギルの侵入が脅威となっている。本種の生息する池や沼にはモツゴ、メダカなど他の在来淡水魚も生息していることが多く、生物相まるとの保全がなされることが望ましい。

特 記 事 項

トウヨシノボリの他型と形態的に類似しているため同定には注意が必要。国土交通省の「河川水辺の国勢調査」では本型をトウヨシノボリとは別種とみなし、*Rhinogobius* sp. SF の記号を独自に用いている。

参 考 文 献

中坊徹次編 .2000. 日本産魚類検索：全種の同定，第2版．
鈴木寿之 .1996. 兵庫県円山川で採集されたトウヨシノボリの1新型．兵庫陸水生物，47.

シモフリシマハゼ

Tridentiger bifasciatus

スズキ目ハゼ科

徳島県カテゴリ

留意

環境庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内における生息地が少ない。
生息個体数が少ない。

分布の概要

国内では北海道～九州、国外では沿海州、朝鮮半島、中国、台湾に分布する。
汽水域の転石帯に生息するが、近縁のアカオビシマハゼよりも低塩分域を好むとされる。ただし、淡水域に侵入することはまれ。雑食性で底生動物やデトリタス、藻類等を幅広く食べる。春～夏にかけて、石や大きめの貝殻等に付着卵を産む。

県内の生息状況

四国では高知県を除く3県から記録されている。内湾性が強く、瀬戸内海側で多くみられる。
徳島県内では吉野川河口域から記録されている。しかし、近縁のアカオビシマハゼや同属のチチブ、ヌマチチブと比較して生息数が非常に少ない。生息に適した塩分環境が限られるためと思われる。

生存に対する 脅威・保護対策

河口域における各種開発事業による総合的な生息環境の悪化が脅威となる。

参 考 文 献

明仁・坂本勝一 .1989. シマハゼの再検討．魚類学雑誌，36(1).
川那部浩哉・水野信彦編 .1995. 日本の淡水魚，第2版．山と溪谷社．

シロヒレタビラ

Acheilognathus tabira tabira

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

報不足

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が吉野川水系下流域に限定されている。
良好な河川環境の指標種となる。
在来種／移入種の判定困難。

分布の概要

在来分布域は濃尾平野、琵琶湖淀川水系、広島県芦田川水系以東の山陽地方とされている。四国北東部にも分布するが、在来分布かどうかわかっていない。
琵琶湖では岸近くから水深 40m までの広い範囲に生息するという。河川では中・下流域に隣接した用水路や流れの緩やかな支流、池等に生息する。おもに付着藻類を食べるとされるが、飼育かではユスリカ幼虫や人工飼料等も食べる。生きたイシガイ科二枚貝類の体内に産卵するが、産卵床となる貝の種への選択性が強いことが知られている。

県内の生息状況

四国では香川県、徳島県から記録されている。高知県仁淀川にも分布するが、これは移入によるものである。
徳島県内では現在のところ、吉野川水系の旧吉野川、今切川、前川から確認されているが、現時点では在来か移入によるものか判明していない。
砂泥底で水際にヨシ帯が広がり、河床には水草がまばらに繁茂する場所にみられ、泥深い場所にはいない。生息地内では年々オオクチバスとブルーギルが増加しており、本種も影響を受けるおそれがある。旧吉野川と今切川での生息数は比較的多いが、前川では少ない。
徳島県内ではどの貝が産卵床として用いられているのか不明であるが、生息地でみられるイシガイ科貝類は、ドブガイ、イシガイ、トンガリササノハガイの 3 種である。徳島県内では同じ春産卵のタナゴ亜科魚類であるヤリタナゴに比べて産卵期間が短いらしく、5 月に婚姻色を出し始め、6 月下旬には通常に近い体色に戻っている。春～初秋にかけては水草の多い浅場で採集できるが、10 月下旬頃から深場に移動するとみられ、岸からの投網では採集できなくなる。

生存に対する 脅威・保護対策

現在、本種の主要な生息地である旧吉野川、今切川では建設省による多自然型川づくりが各所で行われている。中でもヨシ帯を保全、再生する工法の適用は本種の生息に適した河川環境の創造に大きく貢献しているが、施工に伴い河床土を掘削すると産卵床となる二枚貝にダメージが大きいことから、何らかの対策が必要である。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編．1995．日本の淡水魚，第 2 版．山と溪谷社．

カネヒラ

Acheilognathus rhombeus

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

報不足

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息地が吉野川水系下流域に限定されている。
良好な河川環境の指標種となる。
在来種／移入種の判定困難。

分布の概要

在来分布は濃尾平野以南の本州と九州北部、国外では朝鮮半島西部とされている。関東地方における分布は移入によるものである。四国北東部にも分布するが、在来分布かどうかわかっていない。
河川下流域やそれに連なる用水路、大きな湖沼等に生息する。幼魚期には付着藻類を、成魚は水草を好んで食べる。徳島県では9月下旬～10月にかけておもにインガイに産卵し、卵は翌年春まで二枚貝の体内で過ごす。5～6月にかけて、旧吉野川流域では全長20～30mmの幼魚が多くみられることから、3月中旬～4月頃に貝から浮出するものと思われる。

県内の生息状況

四国では香川県、徳島県から記録されている。
徳島県内では吉野川本流、旧吉野川、宮河内谷川、今切川、飯尾川、大谷川などの吉野川水系下流域に分布するが、現時点では在来か移入によるものか判明していない。生息数は比較的多く、ふだんは吉野川本流や旧吉野川などの広い水域に生息するが、産卵期には飯尾川や大谷川等の支流に大挙して侵入する。

生存に対する 脅威・保護対策

基本的事項は他のタナゴ亜科魚類と同様。ただ、本種は生息場所の季節移動が大きいことから、吉野川本流を中心に周辺水路や支流等への移動が可能よう配慮する必要がある。

特 記 事 項

本種は近年になって吉野川水系から確認されたことから、移入による分布との見方が一般的である。しかし、吉野川流域では国土交通省や県による「河川水辺の国勢調査」を初めとした各種環境調査が盛んに実施されるようになるまで、魚類相が十分に調査されてこなかったことも、本種を初めとした淡水魚が近年まで未確認であった大きな要因といえる。吉野川水系の地史や魚類相を考慮すると、本種が在来分布である可能性も十分に考えられる。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.

イチモンジタナゴ

Acheilognathus cyanostigma

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

報不足

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

生息地が吉野川水系下流域に限定されている。
在来分布域での減少が著しい。
在来種／移入種の判定困難。

分布の概要

在来分布は濃尾平野、琵琶湖淀川水系、福井県三方湖、和歌山県紀ノ川水系とされている。在来分布域では生息数の減少が著しい一方で、岩手県、静岡県、中国地方、四国、九州などへ移入により分布を広げている。
河川中・下流域の緩流部や水路等に生息する。雑食性で動物プランクトン、小型底生動物、糸状藻類、水草等を食べる。産卵期は春で、おもにドブガイを産卵床として利用するとされる。

県内の生息状況

四国では4県から記録されているが、いずれも移入による分布と考えられている。ただし徳島県産については、シロヒレタビラやカネヒラと同様に疑問が残る。徳島県への移入は1960年代とされているが、それ以前に吉野川水系下流域の調査がほとんどなされていないこと、和歌山県紀ノ川水系が在来分布とされていることから、徳島県産も在来分布である可能性は捨てきれない。将来の遺伝学的検討を待ちたい。
徳島県では吉野川、旧吉野川、今切川、宮河内谷川など吉野川水系下流域から記録されている。これらのうち旧吉野川と宮河内谷川での生息数は比較的多い。
県内での本種の生息地は一般に、流れが緩やかで河床に泥やシルトが堆積し、オオカナダモが河床一面に繁茂した場所であり、ドブガイ以外のイシガイ科二枚貝類はほとんどみられない。

生存に対する 脅威・保護対策

コンクリートによる護岸、水路の直線化などの河川改修が脅威となる。繁殖に二枚貝が必要なことから、二枚貝の生息環境を保全する必要がある。本種はある程度の汚濁がみられる水域にも生息可能であるが、二枚貝が生息できないほどの汚濁には注意する必要がある。
本種は天然分域とされる琵琶湖淀川水系での減少が著しい反面、移植先では良く繁殖している例が多い。移植先での在来タナゴ亜科魚類やイシガイ科二枚貝類との関係等、今後明らかにしていく必要がある。

特 記 事 項

本種の幼魚が、体型のやや似ているカワバタモロコと誤同定され、報告された例が過去にみられた。小型個体では口ヒゲはほとんど未発達で、体側の縦帯と肩部の暗色斑紋が不明瞭なこともあるため注意を要する。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編．1995．日本の淡水魚，第2版．山と溪谷社．
水産庁編．1998．日本の希少野生水生生物に関するデータブック．日本水産資源保護協会．
徳島淡水魚研究会編．1987．徳島県魚貝図鑑＜淡水魚編＞．徳島新聞社．

ニッポンバラタナゴ

Rhodeus ocellatus kurumeus

コイ目コイ科

徳島県カテゴリ

報不足

環境カテゴリ

絶滅危

I 類

選 定 理 由

生息を脅かす各種要因が増加傾向にある。
確実な分布の記録は無いものの、生息している可能性がある。

分布の概要

かつては濃尾平野、琵琶湖・淀川水系、京都盆地、山陰地方、四国北西部、九州北部に広く分布していたが、現在では大阪府、香川県、九州北部の一部に生息するにすぎない。生息地の環境悪化やタイリクバラタナゴとの交雑などにより激減した。
平野部の砂泥底あるいは泥底の河川敷内の比較的大型の池やワンド、溜池、あるいは流れの緩やかな水路のヨシなどの抽水植物が多い場所に生息する。産卵期は5～9月で、ドブガイなどの二枚貝の鰓葉内に産卵する。おもな餌は藻類。

県内の生息状況

四国における分布は香川県のみ。
徳島県と愛媛県にも分布していた可能性があるが、両県とも確実な記録はない。正確な分布調査が行われる前に、大陸産の近縁亜種タイリクバラタナゴが移入されてしまった。両亜種間では交雑が可能であるため、すでに交雑個体群に置き換わってしまっている可能性が高い。ただし、溜池など隔離された水系に生息している可能性はあるので注意が必要。

生存に対する 脅威・保護対策

圃場整備事業や土地開発にともなう水路・細流の構造変化や消失、河川湖沼の水際の改修、オオクチバスなどの肉食性魚類の移入、タイリクバラタナゴの侵入、水質汚濁、農薬などが脅威となる。
良好な水路・細流と河川湖沼の多様な水際の保全・復元が必要であるとともに、オオクチバスなどの肉食魚やタイリクバラタナゴの移入を阻止する必要がある。また、産卵床となる二枚貝の保護が必要であり、そのためには二枚貝の繁殖に関与するトウヨシノボリなどの魚類が生息できる環境維持が必要である。

参 考 文 献

川那部浩哉・水野信彦編.1995.日本の淡水魚,第2版.山と溪谷社.
中坊徹次編.2000.日本産魚類検索:全種の同定,第2版.東海大学出版会.
徳島淡水魚研究会編.1987.徳島県魚貝図鑑<淡水魚編>.徳島新聞社.
水産庁編.1998.日本の希少な野生水生生物に関するデータブック.日本水産資源保護協会.